

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：42721

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K14021

研究課題名（和文）書字教育の基礎概念としての字体・字形とその歴史的変遷

研究課題名（英文）Glyphs and Glyph Shapes as Fundamental Concepts in Handwriting Education and Their Historical Transition

研究代表者

杉山 勇人（Sugiyama, Hayato）

鎌倉女子大学短期大学部・初等教育学科・准教授

研究者番号：80594605

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代以降の字体・字形概念の形成に関わる歴史的背景を探り、字体が示す「文字の骨組み」の要素を検討した。その結果、「文字の骨組み」は等質・等幅の線（骨格）としてだけでなく、運筆の方向・順序と筆圧の変化、それによって表れる点画の形状も含め、その要素と捉えられてきたことが明らかになった。

また、戦後の学力調査等における漢字字体の正誤基準を調査し、「その文字として読めるか」という基準から、「1画1画を整えて、点画の数を過不足なく書く」という基準への移行を確認した。これらの研究結果を踏まえ、基礎学力としての書写力のあり方や、具体的な漢字テストの正誤基準例を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「字体」が抽象的な概念とされているため、「文字の骨組み」もまた抽象的となり、漢字字体の正誤基準は明確さを欠く現状がある。本研究が示した、運筆の方向と筆圧の変化、それによって表れる点画の形状が、これまでも「文字の骨組み」の要素に含まれてきたという字体観は、字体研究・書字教育研究における新たな方向性となると考えられる。

また、本研究は、書字教育が育成すべきである「字体を正しく整えて書く力（書写力）」のあり方も示している。合わせて「常用漢字表の字体・字形に関する指針」にも例示されていない漢字字体の正誤基準（具体的な字形例）も提示しており、漢字教育・書写教育の基礎研究として大きな意義を持つと言える。

研究成果の概要（英文）：This research investigates the historical background of how the concepts of "Glyphs" and "Glyph shapes" were formed and examined the elements of the "skeleton structure of a character" that composes "Glyphs." As a result, it clarified that the "skeleton structure of a character" does not only refer to the strokes forming the structure, but also includes some other structural elements like the stroke direction, stroke order, and strokes styles (Hane and Harai). In addition, the study investigated the answer grading criteria in kanji tests in achievement tests during the Showa era. The results showed that the criteria transitioned from "Can it be read as a character" to "Is it correctly and neatly written with the appropriate number of strokes." Based on these research findings, proposals were made regarding what the ideal handwriting skills should be as a basic academic skill and specific examples of answer grading criteria for kanji tests.

研究分野：書写書道教育学

キーワード：字体・字形 書字 文字教育 国語科書写 芸術科書道 書写書道教育 漢字学習 漢字テスト

## 1. 研究開始当初の背景

2016年2月29日、文化審議会国語分科会が「常用漢字表の字体・字形に関する指針(報告)」(以下、「指針」とする)を取りまとめた。「指針」は、「常用漢字表」の考え方を具体的な字形例とともに解説したものであり、字体＝「文字を文字として成り立たせている骨組み」、字形＝「字体が具現化され、実際に表された一つ一つの字の形」と定義している。この定義自体は、改定前の「常用漢字表」(1981年)から基本的に変更されておらず、字体は抽象的な概念としての「文字の骨組み」と捉えられている。しかし、それは飽くまでもそれぞれ各人が思い浮かべるものであるから、その「骨組み」がどのような要素で捉えられているのか、明確にはできないと考えられる。

「指針」は、「不特定多数の人々を対象とするような入学試験、採用試験、各種の検定試験等において、漢字の字体・字形の正誤を判断する際の統一的なよりどころ」となるために示された。これによって、学校教育におけるいわゆる「漢字テスト」では字体の正誤を判定し、字形の差は許容するという基準がいっそう明確になった。これまで学校現場では、文字の細部(「とめ、はね、はらい」等)に必要以上にこだわった正誤の基準(しかも、教師によって異なる場合がある)による採点判断がしばしば問題となっており、文字通りこの問題を解決するための「指針」となったと言える。

しかし一方で「指針」の基準は、どんなに乱雑な字形でも「文字の骨組みが読み取ればそれでよい」という印象を与えかねないものである。文字を読みやすく「字形」を整えて書くことを目的とする書写教育の立場からは、指導の上で懸念が生じているのも事実である。小・中学校国語科書写では、学年別漢字配当表の字体・字形をもとにした字形指導が行われる。書写指導の観点からは、漢字テストで整っていない字形(「とめ、はね、はらい」等の区別も含まれる)を誤答とする採点が行われる場合もある(むしろ、そのようなかたちで指導・評価が行われているとあってよい)。要するに、「指針」に即した「不特定多数の人を対象とした入学試験や採用試験、検定試験等」における「字体」を確認する漢字テストと、主に国語科の授業の中で行われる「字形」も合わせて評価する漢字テストは、分けて考えなければならない。このことが学習者にも指導者にもあまり理解されておらず、混乱が生じているのではないだろうか。漢字指導と書写指導にはそれぞれの立場があり、字体・字形をめぐって基準を一致させることは困難な側面があると考えられる。

なお、実際の入学試験や資格試験などでは、「常用漢字表」及び「指針」に依拠した採点基準が明記されている。しかし、それでも採点の現場では見解の相違が見られることがある。これは国語科に限ったことではなく、すべての教科における漢字表記の採点、記述式の問題や小論文の採点等でも起こりうることであろう。字体＝文字の骨組みが、各人が思い浮かべる抽象的なものとされているために、採点者によって解釈が分かれてしまうのである。そのため、基本点画の形状(特に「折れ、曲がり、そり」等の区別)、筆順や点画の方向、筆圧の変化(はね、はらいの形状)等、実際の運筆によって表された一つ一つの具体的な字形を判定するのは、難しいのである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、近代以降の日本語の文字・表記における字体・字形等の概念が形成されてきた歴史的背景を明らかにした上で、書字教育の基礎としての「文字の骨組み」の要素とは何かを再検討することである。なお、本研究における「文字の骨組み」とは、「ある文字をある文字として認識するための最低限の要素」と定義している。

この「文字の骨組み」は、具体的に表された漢字字形において、その正誤を判定する際の基準となる。いわゆる漢字テストでは、具体的に表された漢字字形から字体(文字の骨組み)が読み取れるかどうかによって、その正誤を判定しているのである。つまり、漢字字体の正誤基準(漢字字形として書き表される)の変遷を明らかにすることによって、文字の骨組みの要素の捉え方も明らかになると考えられる。このことから、国語学力調査における漢字書き取りテストの正誤基準の分析と、その歴史的背景の検討を試みることにした。

また、昭和20-40年代における学力調査の実施過程で、漢字字体を正しく整えて書くことが「学力」の一部として重視されるようになり、その学力を育成する書字教育も教育課程の中で重視されるようになった。この視点から、漢字学習と書写学習の関連と、国語学力としての漢字書写力の意義についても明らかにしたい。

## 3. 研究の方法

(1)「字体」「字形」「字種」「書体」という用語の語義について・「当用漢字字体表」以降の字体概

## 念の歴史的変遷について

「字体」「字形」「字種」「書体」という用語について、「当用漢字字体表」から「指針」に至る過程における語義の変遷について考察を試みた。「字体＝抽象的な概念」が、「当用漢字字体表」（1949年）、「常用漢字表」（1981年）、「改訂常用漢字表」（2010年）、「指針」（2016年）の間に変遷する過程をたどり、書字教育・書道研究の視点から再整理した。また、「文字の骨組み」の要素として何が想定されていたのかということ、昭和戦後期を中心として、漢字政策の関係者、国語教育学者、書写書道教育学者、書家らによる「字体」の要素の捉え方から精査し、その内容を改めて見直して検討した。

### (2) 漢字テストにおける字体の正誤基準（文字の骨組み）について・国語基礎学力としての書写力（字体を正しく書き表す力）の成立過程

漢字学習・書写学習において、漢字字体の正誤がどのように判定され、そして基準化されてきたのか、その歴史的変遷を検討した。具体的には、昭和20-40年代に実施された国語学力調査において実施された漢字書き取りテストに着目した。これらのテストでは、具体的な字形例によって正誤の判定基準が示されており、そこから漢字字体（文字の骨組み）をどのように捉えているかを推察することができる考えた。それぞれの学力調査の目的・内容・方法とともに検討することで、字体観の変遷もうかがい知ることができると考えた。

なお、これらの学力調査は、昭和20年代後半から昭和40年代初期における学力低下問題を受けて実施された。これらのペーパーテストによって「読・書・算」＝基礎学力というイメージが定着していったと考えられており、そのなかで字体を正確に書き表す力（書写力）が重視されるようになった。これらの書写教育をめぐる状況について、学習指導要領作成者、国語教育学者、書写書道教育学者の指導法に対する考え方を整理し、現在へとつながることになる国語学力として求められる漢字書写力のすがたを明らかにした。

### (3) 「常用漢字表」の字体観と学校教育における漢字指導の関係について・「指針」を踏まえた漢字テストの正誤基準

漢字字体の正誤基準となる「常用漢字表」及び「指針」の字体観について、改めて詳細に整理・検討した。現在の常用漢字表における字体観は、文字の骨組みを「点画の数」と捉え、ほぼこれが漢字字体の正誤基準となっている。しかし、この基準は抽象的な文字の骨組みを想定しているために、基本点画の形や「はね」の取り扱い等、具体的な文字例に即した場面では、判断に迷うものも指摘できる。これらの「指針」においても明確にされていない例や、あるいは「指針」の具体例から敷衍して導き出すことができる正誤の基準例を抽出し、具体的な正誤基準として提案することが可能である。これらについて、書写教育における字形指導との整合性も踏まえて検証・整理を行い、漢字字体の正誤基準の方向性を示して提案する。

本研究では、具体的な例として「はね」を重点的に取り扱った。「指針」では、はねの有無が字体の正誤に関わらないことを前提としている。しかし、横画の終筆から左下へ向かうはね（「欠」の二画め、「うかんむり」の二画め等）と、縦画の終筆から右上へ向かうはね（「衣」の四画め、「比」の二画め等）の二つの複合画については、いずれもはねの有無が字体（「文字の骨組み」、あるいは文字の部品となる「構成要素」として扱われている。そこで、この構成要素を含む文字について、公的に示された漢字表、近代の印刷活字、教科書に使われた印刷文字、字書やいわゆる名跡とされる古典を参照し、字体・字形例を検証した。これによって、漢字テストにおける「はね」の取り扱いを再検討し、正誤基準を提案した。

## 4. 研究成果

### (1) 「字体」概念の歴史的変遷について 「文字の骨組み」の要素には、「点画の方向・曲直、筆順、筆圧の変化に伴う点画の形状」が含まれている

昭和戦後期を中心として、字体として示されている「文字の骨組み」に含まれる要素の変遷を考察した。「当用漢字字体表」は、「からす口で明朝体の形をなぞったように書いた文字」（「等線体」と呼ばれる）で書き表された。これは、字体を文字通り「骨組み」と捉え、等質・等幅の線で書き表すという試みであった。当用漢字の新字体が、その「骨組み」だけで表したような字形で示され、印刷活字を作成する「骨組み」にもなったことから、文字の骨組み＝等質・等幅の線であるという意識が広がったと考えられる。しかし、「常用漢字表」は、明朝体による「代表字形」を掲げるのみで、字体をある字形で書き表す方法を探らなかった。これによって字体は、明確に抽象的な概念として捉えられるようになり、「文字の骨組み」の要素も各個人の考え方にゆだねられるようになったと考えられる。

石橋犀水(書家・書道教育家)を中心とする日本教育書道研究所・字体研究班、江守賢治(文部省教科書調査官として教育行政に携わり、硬筆・毛筆書写や字体・字形に関する著作が多数ある)林大(戦後の漢字施策の中心人物であり、「当用漢字表」「常用漢字表」両方の作成に関わる)らの字体に関する研究から、字体を構成する要素の捉え方を整理した。その結果、彼らは共通して「運筆による点画の曲直、方向、筆圧の変化によって表れる形状」等を「字体の一部」と捉えていた。つまり、字体を構成する要素には、基本点画の形状(例えば、「折れ」「そり」「曲がり」を区別すること)や、運筆の方向や筆圧の変化によって現れる点画の形状(例えば、「はね」「はらい」「とめ」等を区別すること)が含まれているということになる。これは「常用漢字表」の字体観よりも、より具体化された字体観である。

日本語は、運筆に際して筆圧の変化を伴う「毛筆」という筆記具の文化を持っている。また、社会で最も使用されている印刷文字の書体は「明朝体」という毛筆の運筆の形状を反映した字形である。現在の日本社会では、「字体＝文字の骨組み」の「社会共通の標準」には、「運筆による点画の曲直、方向、筆圧の変化によって表れる形状」が含まれていると解するべきではないだろうか。少なくとも、字体は等質・等幅の線とは捉えられていない。字体が等質・等幅の線ならば、硬筆ではそのように書くべきであるし、筆順も不要であろう。しかし、字体に運筆の原理が含まれているため、毛筆でも硬筆でも同じ字体を筆順に従って運筆するのである。また、字体に点画の進む方向が指示されているため、印刷文字にもその形が表現されているのである。このように字体の概念を捉え直すことによって、現行の小・中学校国語科学習指導要領における書写指導の考え方である「毛筆は硬筆の基礎」論についても、理論的根拠を補完することができると考えている。

(2)戦後の学力調査にみられる漢字字体の正誤基準 「文字の骨組み」の変遷過程 ・国語基礎学力としての書写力(字体を正しく書き表す力)の成立過程

昭和 20-40 年代の学力調査で実施された漢字書き取りテストの正誤判定例を調査し、漢字字体の正誤基準を明らかにした。その基準は次のア～ウに大きく分けることができる。

ア.「判読できるか、できないか」という基準で判断し、画数の増減や続け書き等の省略も許容するもの。

イ.総画数を絶対的な基準として、字形の違いは許容するもの(文字の骨組み＝総画数と捉える)。  
ウ.字形の違いも正誤基準とするもの(点画の形状・接し方・組み立て方等の差によっても誤字となる場合がある)。

このように各学力調査によって、漢字字体の正誤基準に揺れが見られ、基準は字種によっても異なる場合があった。昭和 40 年代以降は、イ.の「文字の骨組み＝総画数」という基準に収斂する傾向にあった。

昭和 20-40 年代、「漢字を書く力」の低下が指摘され、全国学力調査(1956-1966)に代表される学力調査によって、正しい字体・整った字形で書き表す力がテストされるようになった。「一般に、誤答には 1 点 1 画の不確かなものが多いが、これについては、今後もいっそう正しい指導が望まれる。」(昭和 31 年度・全国学力調査報告書)とされるように、学力調査の実施によって、正しく整えて書く力が「学力」として求められるようになったと考えられる。このことは、に示した各学力調査の基準の変遷からも明らかである。昭和 20 年代初期は、「その文字として読めるか」という緩やかな基準であったが、次第に「1 画 1 画を整えて、点画の数を過不足なく書く」という基準へと移行した。その「正しい字体・整った字形で書く能力」を育成するために、書写教育の充実が図られるようになった。また、小学校においていったんは廃止された毛筆指導が、「1 点 1 画を整える」ために必要な学習として見直されることになったのである。

(3)。「常用漢字表」の字体観 「文字の骨組み＝総画数」という考え方について ・「指針」を踏まえた漢字テストの正誤基準の提案 はねるか、とめるか

「常用漢字表」及び「指針」における字体・字形の概念を改めて整理・検討し、そこから導き出される漢字字体の正誤判定の基準について、具体的な字形例によって示し、その問題点を指摘した。常用漢字表の字体観をつきつめていくと、字体を伝えるために必要な能力は、文字の骨組

みの通りに点画を組み合わせ、他の文字と誤解されないように考えて書き表すことである。字形という誤差の範囲内で共有を図り、漢字を運用する力と言える。現在の常用漢字表における字体観では、文字の骨組みをほぼ「点画の数」と同義と捉え、これが正誤基準となっている。

しかし、この基準をもとに具体的な字形を分析すると、基本点画の形や「はね」の取り扱い等、判断に迷うものが指摘される。書写における字形学習との整合性も踏まえて検証・整理を行い、漢字字体の正誤基準の方向性を示した。

「はね」の取扱いについては、具体的に検証を行った。なかでも「横画の終筆から左下へ向かうはね」、「縦画の終筆から右上へ向かうはね」は、字体の一部として捉えられ、字体の正誤基準となる場合がある。これらを含む漢字について、手書き文字と印刷活字の字体・字形の歴史の変遷を検証した結果、「はね」の扱いが以下のように分類できることが明らかとなった。

ア．横画の終筆から左下へ向かうはね

（欠 皮 庀 疋 予 等を構成要素に含む文字）

…左下にはねる（はらう）べきであると考える。

イ．縦画の終筆から右上へ向かうはね

（衣 食 氏 民 長 等を構成要素に含む文字）

…右上にはねる（はらう）べきであると考える。

ウ．例外 縦画の終筆から右上へ向かうはね

（常用漢字の範囲では、遠 園 猿 環 還 旅 派 脈）

…はねても、はねなくても、どちらでもよい。

「字体」は社会共通の約束事であり、時代によって変化することもある。しかし、ここに取り上げた字体・字形例の歴史の変遷から、少なくとも現時点での「画」の正誤基準として有効であると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 杉山勇人	4. 巻 30
2. 論文標題 国語学力における漢字書写力の位置づけの変遷 昭和20-30年代における漢字字体の正誤基準をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鎌倉女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18990/00003676	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 杉山勇人	4. 巻 9
2. 論文標題 はねるか、とめるか 漢字テストにおける採点基準としての「字体」について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東アジア書教育論叢	6. 最初と最後の頁 80-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山勇人	4. 巻 8
2. 論文標題 「常用漢字表」の字体観と漢字字体の正誤基準	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東アジア書教育論叢	6. 最初と最後の頁 50-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山勇人	4. 巻 26
2. 論文標題 全国学力調査（1956-1966）における漢字字体の正誤基準	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教育大学協会全国書道教育部門研究紀要	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山勇人	4. 巻 36
2. 論文標題 昭和20-30年代の国語学力調査にみる漢字字体の正誤基準-漢字学習と書写学習の境界をめぐって-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国大学書写書道教育学会 第 36 回香川大会（オンライン）発表要旨集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山勇人	4. 巻 14
2. 論文標題 書道研究における「字体」概念に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学書道研究	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉山勇人	4. 巻 26
2. 論文標題 書写教育にとって「字体」とは何か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育大学協会全国書道教育部門研究紀要	6. 最初と最後の頁 48 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 杉山勇人
2. 発表標題 漢字指導における「字体」の概念と その正誤基準
3. 学会等名 東アジアの書と書教育研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 杉山 勇人
2. 発表標題 はねるか、とめるか 漢字テストの採点基準としての字体について
3. 学会等名 書論書道史研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 杉山 勇人
2. 発表標題 昭和20-30年代の国語学力調査にみる漢字字体の正誤基準 漢字学習と書写学習の境界をめぐって
3. 学会等名 全国大学書写書道教育学会(香川)大会【オンライン】
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉山 勇人
2. 発表標題 戦後国語学力調査にみる 漢字テストの正誤基準
3. 学会等名 東アジア書と書教育国際オンライン研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉山 勇人
2. 発表標題 書道研究における「字体」概念に関する一考察
3. 学会等名 東アジア書と書教育オンライン研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉山 勇人
2. 発表標題 書写書道教育の基礎としての「字体」概念 漢字テストの正誤基準を踏まえて
3. 学会等名 書論書道史研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関